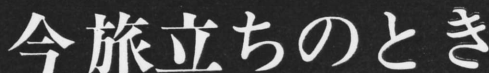


昭和62年3月8日
編集人兼発行人
田県能代市高橋2番1号
田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷



三六六名巢立つ

「出会い」を大切に

校長 三田元悦



むけの言葉を申し上げたいと
います。それは「出会ひ」を
切にした人生であってほしい
いうことであります。

「出会ひ」と言ふ思い出
のが、一昨本校の創立六十
年記念式典の折に伯朝十五期
である佐々木満善議員が

部 說

を知識としては知っていても、事
際にそれを行動に表わす時には未
当の意味を忘れがちであるとい

求して、友達のために尽くしてやるという気持ちがあるというわけである。

をして交際しているが、少しでも自分に不利なことや気に障ることがあると、いわゆる陰口を

するといったものはいいい例だ。
本校生の場合を考えてみても

総合優勝などの原動力としておに貢献した。

い一步を踏みだす。

なお今日の卒業式では皆勤賞表彰が行われる。皆勤賞は三年

の人に贈られるもので、今年は
しかも昨年と同数の二十八名の
賞となり、代表として秋元健二

校といふところは學ぶところである。しかし、もっと大切なことは、よき友、よき師と出会うこと

あります。

皆さんは今、母校を去るにあたり、果たして心の支えとなる

に思ふのであります。

人が一人増えるということではないと思います。その人に出会うことによって、今までとは違

ことが出来るようになるということでありませう。その中には、新たな感動とか共感とか憧憬とい

真の友情を考える

め、限、限、必要な構えに思う
のであ。

今、三年生は卒業し、それぞれ
がそれぞれの新しい環境の七十自
分の人生を歩みだしてくるに、
その時、晋安に新しい希望、その
環境の中で果たした新しい仲間
と別れて、うまやをつけてくる
なかうかにうてえと思ふ。し

(一) 表彰状を念ふる。
 (二) 秋元健一・金(健市)
 小笠原一・佐藤 保
 保坂一成
 (三) 越前勝子
 (四) 小林琢磨・高森泰一
 (五) 嶋田 健・武田 直
 (六) 工藤 滋・北林 哉
 佐々木蔵、佐藤悦明
 佐藤勇成、佐藤義博
 本主 佐伊摩孝仁
 (三) 浅野 智之
 (四) 斎藤敏宏・富田 一
 大井庄太郎、高体大藤田
 連廣の表が行われ、後援は高体
 大井と、秋田県高等学校体育連盟(を)

国立大二次試験

足切りで大揺れ

六十二年度国立大二次試験が、三月一日以降、それぞれA、B、Cグループに分れて行われる。今年各通次試験開期が変わり、複数併願可能となつたわけだが、本校の影響を受けたのは、秋田大の八四名を最高に、弘前大の五十一名、山形大の三十八名出願者は軒並み増加した。この頃は全国的状況はそのため各大学の志願数はところどころ上昇し、本学側は選課方式に順応するを得ずなごといふ状態を抱えている。

今回、この設置選抜による足切り、方式実施と天大等は、全国五千九百五十四学部、本校が受験校北出たとして山形大、弘前大、北海道大、宇都宮大学があ

るが、中でも山形大は、大学の設置選抜実施年当座である五〇倍に対し、確定応募者六九倍、その結果、一千五百名の時点で二次試験受験資格失っている。本校生の中にも、設置選抜で約千七百名が不合格者十名を出すが、スライム健闘あるが、やはり山形大（二一）、大文工（一）は教大大学で足切りの犠牲者が出ている。このころまでは、政界・官庁としてはわが有利だが、中卒の層は三校、三校と同額ともてずくも惜かな。

ともあれ、今年は例年に比べ一回の二次試験となった。

三角点

[illegible]